

Singapore Riverの概要

シンガポール川は、1819年に英国の交易拠点として近代シンガポールが始まった場所です。その後の年月を経て、世界中のさまざまな地域から多様なコミュニティがこの川のほとりにやって来て定住しました。人々はここに埠頭（ふとう）や波止場、橋、住居や村、倉庫や工場、宗教施設、そして困っている人々を支える施設などを建設し、川は商業の中心地として重要な役割を果たしました。

現在では、シンガポール川は交易拠点としての役割を終えています。都市の発展を支える重要な水路となっています。また、この水路を特徴づけるさまざまなランドマークや建物、地域は、観光名所としても多くの人々に親しまれています。

今回、史蹟史料部3名は四十万理事および本校職員有志とともに、シンガポールリバーを3時間かけて散策しました。今まで知らなかったことや何度も通っているのに気が付かなかったことなど、多くの発見がありました。シンガポールの発展を語る上で重要な位置を占めるこのシンガポールリバーについて紹介します。

計者ジョージ・コリアーにちなみ命名されました。埋め立て後は、商人たちが直接海にアクセスできるオフィスを構え、船の到着を望遠鏡で見張りしました。20世紀初頭には、香港上海銀行、オーシャンビル、インド・サラセン様式のアルカフ・アーケードなど、壮麗な建物群が並び「上海の外灘」に例えられる景観となりました。

1970年代以降、多くは高層ビルに置き換えられましたが、旧郵便局のフラートン・ビルと、当時東南アジアの高層ビルだったアジア保険ビルは保存され、現在はホテルやサービスアパートメントとして活用されています。写真のフラートンホテルは2015年にNational Monumentに指定されました。この堂々とした豪華な建物を、海側から見た往時の人々は、きっと感嘆の声を上げたのではないのでしょうか。



フラートンホテル 2025年

②Cavenagh Bridge (カヴェナ橋)

カヴェナ橋は1869年に完成した、シンガポールで最も古い吊り橋で、官庁街と商業地区を結んでいます。知事オードリー卿の指示により恒久的な橋として建設され、橋の部材はスコットランド・グラスゴーで製造され船で輸送、現地で組み立てられました。設計はP & W MacLellan社によるものです。橋の名称は当時の知事の義父であるウィリアム・カヴェナ少将にちなみます。



カヴェナ橋 1890年
(出典: SINGAPORE RIVER WALK BOOKLET)

完成当初は歩行者と馬車、路面電車等の通行に利用されましたが、1910年から車両通行は禁止され、現在は歩行者専用橋として保存されています。装飾的な鋳鉄パネルや歴史的銘板が今も残り、National Monumentに指定されています。

現在シンガポール川に架かる橋の中で当時の姿を保っている最古の橋であり、およそ150年の時を経てなお、現役を続けていることに感動します。独特のフォルムをもつこの美しい橋を多くの観光客がカメラに収めていました。シンガポールの歴史を語り継ぐこの橋を、いつまでも大切に守り続けたいですね。



カヴェナ橋 2025年

③Boat Quay (ボート・キー)

Boat Quay (ボート・キー)は、19世紀から20世紀初頭にかけて重要な商業の中心地でした。この地区の名前は、ボートや貨物船が停泊していた岸壁に由来します。ボート・キーは元々満潮時に洪水が発生しやすい



ボート・キー 1900年代
(出典: SINGAPORE RIVER WALK BOOKLET)

①Collyer Quay (コリアー・キー)

コリアー・キーは、もともとラッフルズ・プレイス背後の自然海岸で「倉庫の裏」と呼ばれていました。シンガポール川の混雑解消と商業地区拡張のため、1861～1864年に埋め立てと護岸工事が行われ、道路と新たな建物用地が誕生し、設



コリアー・キー 1880年代
(出典: SINGAPORE RIVER WALK BOOKLET)

広大なマングローブの沼地でした。1822年にシンガポール初の埋め立てプロジェクトが開始され、埋め立てられた後、ポート・キーは、嵐や荒波から守られ、地域の商品の保管と流通に安全で便利な場所となりました。そのため、港が開港されるとシンガポールの初期の貿易活動の中心地、特に港を通じた東南アジア貿易の重要な拠点となりました。そして、多くの商船がシンガポール川をポート・キーまでさかのぼりここに停泊し、貿易活動が活発に行われました。シルク、紅茶、クローブ、ナツメグ、コショウなどの貴重なスパイスは、植民地時代のシンガポールの初期に求められていた上位の商品でした。19世紀後半から、マラヤとその周辺諸島からの換金作物や、ゴム、錫、サゴ、ココナツコブラ、砂糖などの原材料の重要性が増しました。



ポート・キー 2025年

ポート・キー周辺は、さまざまな民族グループ、特に中国系、マレー系、インド系の商人や労働者たちが集まって住んでいたエリアでもあります。中国系の商人は、特に海上貿易において重要な役割を果たしていました。また、マレー系やインド系の商人もここに集まり、シンガポールの多民族文化が色濃く表れていた地域でもあります。20世紀に入ると、ポート・キーは次第に経済的な中心地としての役割を失い、シンガポールの他の地域へと商業活動が移行していきました。近年の再開発によって、古い商業ビルや倉庫がレストラン、カフェ、バーに変わり、観光客や地元の人々にとって賑やかなエンターテインメントスポットとなっています。

※Quayとは石やコンクリートで作られた波止場、埠頭、岸壁のことです。日本では、江戸時代に主要河川は物流の中心として使われ、川沿いには河岸(かし)と呼ばれるQuayと同じ役割を持った場所が發展しました。同時代に日本とシンガポールの川で、同じような役割を持ったQuayと河岸(かし)があったのです。

④Former Thong Chai Medical Institution(フォーマー・トンチャイ・メディカル・インスティテューション 旧同濟醫院)

1867年、シンガポールの中国系移民7人によってThong Chai Yee Say(同濟醫社)として創立され、貧困層を対象に無料で中医(中医・中薬)診療を提供しました。政府の医療サービスが十分でなかったためです。1891年～1892年にかけて、英国海峡植民地総督シリル・クレメンティ・スミスの土地寄贈により、現在のWayang Street(現 Eu Tong Sen Street 50番地)に建築が進められ、1892年に完成。このとき名称をThong Chai Medical Institution(同濟醫院)に改称しました。1973年7月6日、この建物はシンガポールのNational Monumentに指定されました。建物は中国風コロニアル建築の貴重な例として知られています。1976年に医療機関としての機能は移転され、Chin Swee Roadに新しいThong Chai Buildingを竣工して移転し現在も医療機関として運営されています。



診療の様子 1890年代
(出典:SINGAPORE RIVER WALK BOOKLET)

旧建物は政府が所有し、1979年にアート&クラフトセンターとして再開されました。1990年代にはナイトクラブやレストランとして使われ、2000年にはTung Lok Groupによるレストラン営業が行われましたが、2003年までに終了しました。2005年、米国本拠の健康・美容系企業Forever Living Products

Internationalが約 \$7百万で取得。多くの歴史的調度品や装飾を保存しつつ、シンガポールのオフィスとして使用しています。現在、内部は商業用途(企業オフィス)で使用されています。

貧困層の人々を対象に無料で医療を提供するという姿勢が素晴らしいですね。このような助け合いの精神はどんな時代でも必要だと思いますし、どんな時でも大切にしていきたいものです。それにしても、現在も病院が運営されていることには驚きました。いつまでも続いてほしいです。



旧同濟醫院 2025年

⑤Masjid Omar Kampong Melaka(マスジッド・オマル・カンボン・ムラカ)

クラーク・キーの近く、現代の高層ビルに囲まれる静かな空間に突如として現れるのが、シンガポールに現存する中で最も古いモスクMasjid Omar Kampong Melakaです。1820年にアラブ系商人であったSyed Omar bin Ali Aljuniedにより建立されました。



Masjid Omar Kampong Melaka
1950年代
(出典:SINGAPORE RIVER WALK BOOKLET)

建設当初は木材とパームの屋根で作られた簡素な建物でしたが、1855年、息子Syed Abdullah bin Omar Aljuniedの寄付で、レンガを使ったより頑丈な建物に改築されました。約130年以上変化のなかったこの建物は、1981～1982年に事務施設や礼拝前の沐浴エリアが追加され、1985年にはミナレット(尖塔)がシンガポールで初めて設置、その後は女性用礼拝室やエアコンが導入されるなど、時代の変化に応じて現代施設へと変化しながらも、旧来の柱や梁は今も残されています。

2001年にナショナル・ヘリテージ・ボード(NHB)によって歴史的建造物(Historic Site)に登録されました。このモスクは特に近くのオフィスで働く人々にとって重要な礼拝スポットとなっています。創設者は、パランバン出身の有力なアラブ系商人であり、慈善活動にも積極的でした。アルジュニード家はシンガポール社会に多大な貢献をした家族として知られ、「Aljunied」や「Syed Alwi Road」といった地名にも名を残しています。



金色のドームと星と三日月のミナレット
2025年

シンガポールでモスクと言えば、アラブストリートでシンボリック存在のMasjid Sultanが有名ですが、観光地化されてい

ないMasjid Omar Kampong Melakaは穏やかな時間が流れており、オフィスワーカー達の憩いの場ともなっていました。

⑥Alkaff Bridge(アルカフ橋)

シンガポールリバーの川上へ向かって歩いていくとロバートソン・キーに架かる、カラフルで象徴的な橋にたどり着きます。

Alkaff Bridgeは、シンガポール都市再開発機構(URA)による河岸(かし)プロムナード整備の一環として、1997年に建設が始まり、1999年に完成しました。橋の長さは約55メートル、重量約230トン。形状は伝統的な沿岸軽船トンカン(tongkan)を模したユニークな見た目になっています。

橋の名前は、かつて近くにあったAlkaff Quay(アルカフ・キー)に由来し、この地区は裕福で影響力のあったアラブ系実業家アルカフ家(House of Al-Kaff)にちなんで命名されました。アルカフ家は19世紀後半から20世紀初頭にかけて、モスクや邸宅、アーケードの建設など多くの活動に関わった名家です。

2004年1月29日にフィリピン出身の国際的アーティスト、Pacita Abadがこの橋をキャンバスに見立て、鮮やかに彩色し、「Bridge of Art(芸術の橋)」として生まれ変わりました。アバドは2003年春にSTPI(Singapore Tyler Print Institute)のアーティストとして招聘されました。2003年12月から下準備が始まり、合計で55色、900リットル以上の工業用塗料を使用し、まるで虹のように、多彩な色と繊細なパターンを橋全体に施しました。その結果、Alkaff Bridgeは単なる交通インフラから、公共空間を彩るアート作品へと生まれ変わりました。

今では多くの観光客や地元の人々が橋を訪れ、鮮やかな色彩を背景に写真を撮る映えスポットとしても人気です。夜にはライトアップも楽しめ、昼夜問わず魅力あふれる景観が楽しめます。



アルカフ橋 2025年

★River cruise(リパークルーズ)

伝統的な木造船のバムボートでボート・キー〜クラーク・キー〜マリーナベイを巡るリパークルーズは、水上からマリーナベイ・サンズやマーライオン像を見ることができます。シンガポールでの思い出作りにいかがでしょうか。



★Ice Cream Sandwich(アイスサンド)

カヴェナ橋近くの公園にシンガポール名物アイスサンドの屋台を見つけました。紙に包まれたアイスクリームを包丁でぎゅっと切り、緑とピンクのカラフルなパンに挟んでくれます。アイスは定番のバニラやチョコの他にドリアン味など、12種類ほどありました。中のアイスとほんのり甘いパンの組み合わせが絶妙でした。近くに寄った際は、ぜひお試しあれ!



編集後記

今回の散策では、日本との不思議な共通点も感じました。シンガポールの発展を支えたシンガポール川にいくつかあるQuayと、江戸時代、全国各地の主要河川で発展し日本の流通を支えた河岸(かし)が同じ役割を持っていることに驚きました。場所は違っても、人間が考えることは同じで、似たようなものが作られたことは大きな発見でした。

かつて交易の拠点として栄えたシンガポールリバーは、現在は開発が進みレストランやカフェが多く立ち並ぶおしゃれなエリアへと変貌を遂げ、華やかな観光地として多くの人々を魅了しています。しかし、今もなお歴史的な価値を色濃く残しています。古(いにしえ)に思いを馳せながら、シンガポールの歴史や文化を感じる場所としてぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

番外編 シンガポールリバー周辺のおすすめ

★Kucinta Cats(クチンタ猫)

カヴェナ橋の南端には、クチンタ猫という、3体のブロンズ像が設置されています。これは、マレー語の「猫(kucing)」と「愛(cinta)」を組み合わせた言葉で、シンガポール原産の猫とされるクチンタ種を象徴するものです。



わたしたちは、探すのにとっても苦労しましたが、見つけた時には「やった!」と思わず声をあげてしまいました。みなさんも、ぜひ、探してみてください!

★ハンド・イン・ハンド

ボート・キーのシンガポール川沿いにある中華料理のお店です。夜はまわりの素晴らしい夜景も楽しめます。リーズナブルで、美味しいです。日本語を話せるフレンドリーな店員さんもいて、オススメです。



(左から)三宅教諭、佐藤教諭、中野教諭、島田校長、四十万理事



(左から)阿部教諭、永濱教頭

参考資料: Singapore River Walk

<https://www.roots.gov.sg/nhb/singapore-river-walk>

文責・画像:シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校
教諭 佐藤裕之、中野一生、阿部香奈